1. 林子平の遺書

問　×月×日付K新聞に、O氏が最近林子平の遺書を入手したが、I氏も同じ書簡を所有していると報道しています。この記事によると、O氏[(1)]のもの[(2)]には「大槻文庫」の捺印があり、十数万円で買入れたものであるから、この方が本物であるという印象を与えます。郷土史家の意見も二三のせてありますが、いずれともはっきりしたことを示してはいません。一体、どちらが本物なのでしょうか。

答　まず最初に、書画などの現物そのものについて、その真偽を判定することはあくまで図書館の職能ではないことをおことわりして置きます。そして図書館としては、もし要求があれば、問題点を解明する図書資料を、中正に提供する立場にとどまるものであります。

さて、この遺書といわれるものは、林子平が、その大作「海国兵談」が余りにも先覚的だったため、幕府の忌諱に触れ、二度まで喚問を受け、身辺に危険が迫った時[(3)]、親友の小川只七に送ったものです。これは、数ある子平書簡中でも、殊に重要で、貴重なものとされてきたものです[(4)]。明治初期、林子平の偉大さが全国的に再評価された時、仙台に子平の筆蹟をまねる妙手がいて、数多くの偽作の子平物を世間に流したということです。それらが、既に100年近くも経過し相当古色も出て、一見真偽まぎらわしいものとなっているといわれます。この書簡の偽作も、過去に、そこここから現われ、往々、真蹟発見などと何回か新聞紙上に報ぜられたことがあります。しかし、同一の真筆が幾通も存在する筈はないので、伝来の明らかでないものは、いずれも偽作や模写のたぐいであるといわれます。

そこで、今回問題になっている二通の遺書について、それぞれ御納得のいくような資料を次に挙げて御参考に供します。

只七宛の書簡すなわち本物は、小川家の本家に伝存されてきましたが、幕末大槻磐渓がその断片の割愛を受け、前後の全文を模写して分身というべきものを作成し愛蔵することになった事実があります[(5)]。「大槻文庫」の印記があるのはこの方であります。このことは、大槻磐渓が「跋林子平書」に次のように記しています。

『林子平吾藩一奇士也。〔中略〕小川国手家。蔵子平贈其従祖只七君俗牘一通。蓋子平之著海国兵談有触忌諱。官召而詰問。其禁錮令下実在寛政四年五月十六日矣。此牘乃作於其閏二月十五日者而志気慷慨従容閑雅。絶不見推挫衰颯之色。可以概平生所養矣。余嘗欽子平之為人因請国手得其中一片断而珍蔵之。及還此巻遂書此報厚志云。嘉永辛亥〔4年〕復月〔11月〕』

以来、これら二通の書簡の関係について、研究者の間では、周知の事実となっていたものであります。戦前、昭和17年7月18日から21日まで、仙台先哲偉人顕彰会・斎藤報恩会博物館・仙台地方海軍人事部共催で斎藤報恩会博物館に於て開催された「林子平先生百五十年祭記念展覧会」に

も、この２通が、奇しくも隣合わせに展示されたことがあります。出品目録〔「仙台郷土研究」第12巻第８号所載〕に、

『14.　書状（俗牘）　１巻　　所蔵者　小川〔道郎〕

寛政四年閏二月十五日小川只七宛、一部ヲ大槻磐渓ニ譲リ模写シテ之ヲ補フ

15.　書状（俗牘）　１幅　　大槻〔茂雄〕

大槻磐渓一部ヲ小川氏ヨリ譲受ケ前後ヲ模写シテ補フ

16.　先哲林子平尺牘１枚　　常盤〔雄五郎〕

大正五年古川林信教発行〔上掲「14.書状」の木版印刷〕』

とあるのがそれであります。

戦後、これら２通の所在に移動が起りました。そのことについて、「本食い虫五拾年」（常盤雄五郎）に次の記事があります。『これは真物の話であるが先年東京の弘文荘という古書肆に林子平真蹟[(6)]の書簡が売物に出た。価格は１万円であった。〔昭和20年代？〕この書簡は前に記した小川只七宛２月15日附のものの一部分である。元来この書簡は小川家に伝来してあったのを、昔大槻磐渓が懇望してその一部分の10行ばかりを割愛を受け、足りぬ部分を磐渓自ら籠字〔かごじ〕に模写して完全なものにしたという。一部は真筆一部は模写したものである。

さて私の同好にＩ翁〔猪苗代翁〕という医伯があって郷土人の書画を愛好し〔中略〕私はＩ翁に弘文荘の書簡を購求せられよと勧めて見たが、翁は値段が高過ぎるとでも思ったものか、遂にそのままにして見送った事は頗る遺憾であった。次の話を聞くと更に其の感を深める。この事があってからの或る日、Ｉ翁の招きに依って翁を訪ねたところ、一婦人を紹介せられた。この婦人こそは、小川只七の後裔であり、東京に在住せられているとの事で、前記の只七宛書簡（他の墨蹟と併せて１巻の巻軸としてあった）を持参して居た。そこでＩ翁からこの巻軸の入手方に就て色々相談があり、私も意見を開陳した。其の折は値段の点で折合わなかったが、後日になり遂にこの巻軸は翁の有に帰し、現にＩ家に秘蔵せられている。

この書簡は前に記した如く、大槻磐渓が其の一部分の割愛を受けて居るから、無論其の部分は欠けている。若しもＩ翁が、弘文荘に出たものを購求して置いたならば、併せて完璧なものになるのであったが、これを入手するに至らなかったことは返す返すも残念である。翁も今では黄泉の客となり、弘文荘の書簡も、今となっては、誰の手に渡っているやら、其の後の消息を知らない。』

この種の題材は、入念かつ公正な調査・取材を要する学芸的分野のものであって、社会面などの興味本位のニュースとして扱うには無理があります。御来書にうかがえるような、一方的な皮相な判断を読者に抱かせる結果になり勝ちだからであります。すなわち、Ｏ氏が入手した書簡が本物であって、その他のものは偽物であるようなきめつけ方は誤りであって、上述の資料によって明らかな通り、問題の２通の関係は次のように要約することができるものであります。

只七宛書簡 → 小川家 → I家

↓

断片＋模写 → 大槻家 …→ 弘文荘 …→ O氏？

なお、実物の真偽判定については、別途権威ある専門家の鑑定にまたねばならないことは当然であります。

注(1) 偉大な先覚者。名は友直、字は子平、六無斎と号した。世人は「りんしへい」と呼んだ。幕臣林源吾兵衛（笠翁）の次男として江戸で生れた。博識多能で兵学武芸にもすぐれ、琉球から北海道にいたるまで国中をくまなくめぐり、国土・地勢・政刑・風俗・民情のあらゆるものを視察している。国際情勢の認識もきわめて深く、夙に海防の必要を説き「海国兵談」「三国通覧図説」を著した。幕府は、虚説を流し人心を乱すものとして、「海国兵談」を発禁し版木を没収の上、子平をその兄である伊達家の家臣林嘉善の家〔表柴田町42〕に幽閉した。約1年後の寛政5年〔1793〕6月21日、子平は禁錮のまま病歿した。56才、仙台北八番丁〔現在の住居表示、子平町〕龍雲院に葬る。

注(2) 只七様え

相呈候愈御壮健に被成御座候や

一、家兄は云に不及総て仙台の人えは一人えも不申遣候足下へも不申遣候処危く相成候故足下は格別の知己なれば申遣すなり乍然家兄〔子平の兄嘉善〕始め誰人えも必々御口外被下間敷候云えば損が出来又掻〔ママ〕動も出来候がいや也必々只一人秘して被差置小子が死ださたあらば其時御願の一巻を御届可被下候小子が死ざる以前は足下の箱中に御あづかり置可被下候

一、小子は不幸にして二月六日の頃より陰陽傷寒に而危き目に逢申候大邪は除き候得ども食気一円なし甚疲れ申候命数尽るかも難斗奉存候

一、二月晦日壬〔閏〕二月八日両度に呼出も有之候得共病気故不罷出残念如山也余り無念さに十二日別紙の通相達申候どうする事やら不相知候

一、小子は病死になる歟刑死になるかにて有之候どの道にも小子が死を御聞被成候はば此書状三人の由〔猶〕子共の内え御届可被下候活候はば御引さき可被下候外の用ではなし死期の言葉を若年共に遺すに而御座候世の中はおかしなものに御座候小子が遺言あることは不似合様に御座候

一、小子病気の事は家兄始め仙台の人には一向に不申遣候あんじさせて益なし珍平〔嘉善の子、後に子平の墓碑を建てた〕を登させる抔とて銭を遣はせて益なし必々御沙汰御無用に被成被下候至而益なき事なり死だ時云出してすむ事也

一、再会難期奉存候間御閨中様衛守〔只七の子〕子宜く被仰達可被下候呉々も世間で小子

が死ださたのない内は何方へも御知せ被下間敷候　　草々頓首

壬二月十五日　　林　子　平

小川只七　様

尚以て別紙達御目に懸候

注(3)　ロシア船の南下が必至であることを予見し、海国として対外兵備が急務であることを論じた書で、全16巻。天明6年〔1786〕46才の時成稿し、その翌年から1千部の計画で出版を始めたが、資金調達に苦しみながらも遂に素志を貫き、寛政3年〔1791〕年4月54才の時完結した。完本わずかに38部に過ぎなかった。9か月後、幕府の忌諱にふれて絶版となった。

注(4)　画人。諱は道隆、萬笑と号す。伊達家医員小川氏の別家。禄百石、小姓組、林子平と無二の交りがあった。文化13年6月21日歿、享年80、新坂通荘厳寺に葬る。

注(5)　蘭学の大家大槻玄澤の次男、諱は清崇、字は士廣、通称平次、磐渓はその号である。江戸昌平校に学ぶこと10年、俊才のほまれ高かった。後に京都・長崎等に歴遊し諸大家と交わった。32才の時、仙台藩の儒員に挙げられ、江戸藩邸で侍講の職にあった。早くから開港論を唱えた進歩的学者で、弘化嘉永の間西洋砲術をもマスターした。文久2年〔1862〕仙台に移り、養賢堂学頭を命ぜられた。戊辰戦争が始まると、藩主伊達慶邦は軍の文書を司らせた。敗戦後そのため戦犯となり投獄された。明治4年4月罪を許され、東京に移り住んだが、明治11年〔1878〕6月13日、78才で歿した。東京高輪東禅寺に葬る。「論語約解」「孟子約解」「近古史談」等数十種の著書がある。2子如電・文彦ともに学者として一家をなした。

注(6)　明治20年7月10日仙台市に生れた。内閣文庫・東北大学附属図書館・宮城県図書館に永年勤続、宮城県史編纂に従事中、昭和31年12月15日急逝した。郷土史界の第一人者であった。

資料　本食い虫五拾年（常盤雄五郎）

六無斎遺墨（伊勢斎助編）

増補六無斎遺墨考証（鈴木省三）

増補六無斎遺草（林次郎編）

林子平伝記（鈴木省三）

〔I家秘蔵書簡は、その後仙台市博物館所蔵となった。「仙台市博物館図録」に収録されている。〕